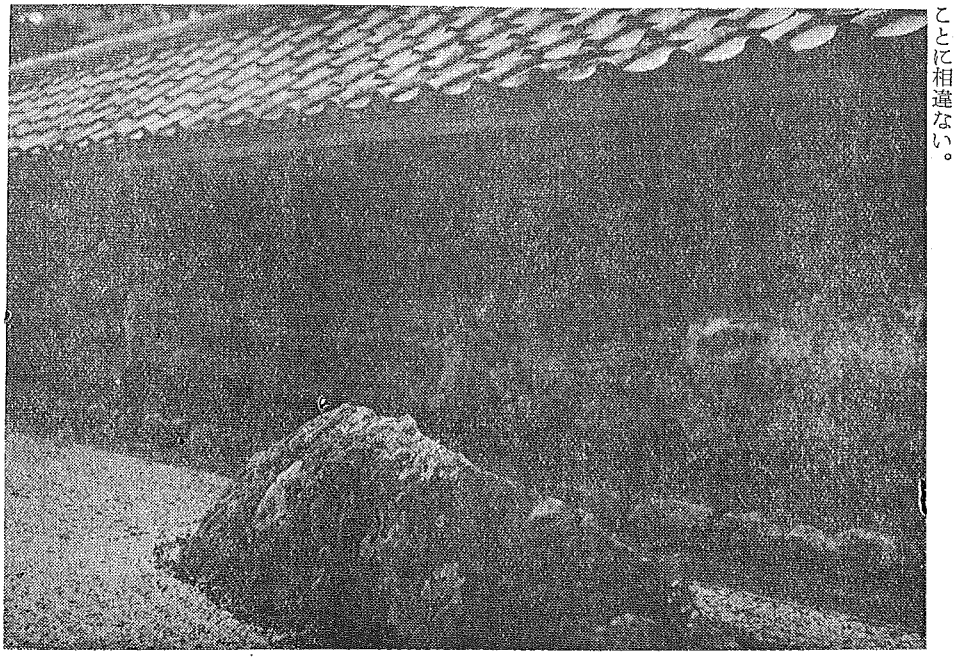
洛友会々報

京都市左京区吉田
京都大学工学部
電気科教室内
洛友会



京都大学に学んだために、私共の私的生活が幅広くなつたのは事実である。一面から、大人びた教養を受けたと言われるかも知れない。龍安寺の石庭（せきてい）の如きを鑑賞することの出来たのは嬉しいことに相違ない。

研究四十年

大正六年六月、わが電気工学教室の青柳先生が電気工学に関する研究に専念するため、財団法人青柳研究所を設立されたのを昭和十四年十一月、鳥養先生が新たに理事長に就任すると共に、資源開発、特に金属材料、各種化学製品等の確保を切望する国家的要望に副うため、その内容の充実と規模の拡大を図り、電気、物理、冶金及び化学等の総合研究に全力を注ぐ事とし、名称を応用科学研究所と改めた。

本年が恰かも創立四十周年に相当するので、去る五月二十日、文部大臣代理緒方大学学術局長、滝川京大総長始め多数の来賓の下に盛大な記念式が挙行された。その時の鳥養理事長の挨拶は次の通りであつた。

挨拶

私共の研究所は今年満四十才に達しましたので、本日さゝやかな祝いの式典を挙げましたところ、来賓各位にはお忙しい中を、この見すぼらしい場末の貧弱な当所まで御来臨下さいまして、その上、私共のふつつかな研究状況を御視察頂きますことは、私共一同の無上の光栄でございまして、心からの感謝を捧げる次第であります。

顧みますれば、この四十年は、私共にとつては本当に永い永い歳月でありました。当所の発足は一九一七年でありますが、この年は丁度ソ聯の革命が成立した、その年に当るのであります。言わば本研究所は共産ソ聯と年令が等しい訳でありますが、この事実から考えただけでも、この四十年というものは、世界情勢の、歴史初まつて以来の大変動期であつたことが知られるのであります。

科学技術の分野を眺めてみますと、学界及び技術界に、一時期を劃した真空管の最初の発明は一九一四年でありまして、当所創設に先き立つこと僅かに三年であります。当時は社会の模様は今日に比べて甚しく劣つていて、ラジオさえ未だ実現に至らず、短波もとより発見せられず、無線通信が専ら火花式長波に依存していた時代であります。それが真空管の急速な、そして長足の進歩発展につれて、今日の電気計算とか、テレビとか、オートメーション等々の、この社会にまで発展して参つた次第であります。人類の文化或は生活が、世紀の進展を遂げたのは、真空管の発達に負う処が極めて大きいのであります。然るにこの真空管も今では最早や老令期に入つた感があり、次代の花形はシリコン等のトランジスタなどに取つて代られるだろうと言われる形勢になつて来ました。然らば、この四十年という歳月は、真空管という科学界の王様の一代記と言えるのであり、又その後継者の生れ出た期間なのであります。そのほか各種放射線の利用、各種新材料の発見、測定法の進歩による精度純度の向上等が、互いに相交錯した科学の歴史的転換期に当るのでありまして、私共が、この四十年を永い永い歳月であつたと申すのは、決して暦の上の年月を指すのではなく、科学の激しい変遷進歩と、それに引きずり廻されて来た吾々の体験を言うのであります。

このような科学の急進展に対処するため、本研究所は、一九三九年に組織の根本的改革を断行し、設備研究力を改善増強しつゝ今日に至つたのでありますが、現在当所に業に従うものは所員、嘱託合せて卅五名、また研究課題及び経理状況は、別途印刷物で御覧頂いた通りでありますから省略させて頂きます。

太平洋戦争中、当所は内閣の研究命令を受けたため、所員は相当の労苦を経験し、引続き占領軍に一時接収せられ、更にインフレーションによる経営難あり、これらを想い起しますと、よくも、まあ、この微力な民間研究所をこゝまで持ちこたえて来たものだと感慨深きものを覚ゆるのでありますが、この間において、吾々は政治や営利に妨げられない、自由な立場に在る民間研究機関の存在並にその使命が極めて重要であることを痛切に知ることが出来、又その維持経営が容易ならぬものであることを体験し得たのであります。それだけに、私共は本日は本当に嬉しいのであります。心から喜びを感ずるのであります。率直に言わして頂きます。そして聊かの誇りを感ずると共に、将来に向つて、当所を守り抜くと共に、使命の達成に一層精進しなければならぬ覚悟を新たにするものであります。もとより本日のこの喜びは全く文部省、京都大学をはじめ、御臨席の皆様から寄せられた不断の御激励、御援助並に創設以来の役員諸氏の御指導の賜でありまして、御礼の言葉に窮している次第であります。

学界、技術界の将来は毎秒毎分進歩を続けて行くでしょう。吾々はウカウカしては居られません。皆様には何卒従来にも増して御支援を賜りますよう御願い申上げます。

本所を御援け下さる各位並に物故せられた研究所先人の霊に、深甚なる感謝の意を捧げて御挨拶とします。

東京支部総会

昭和卅二年五月十三日午後五時より電気協会ビル大会議室において開かれた。

巽支部長より事務並に決算報告（別項）があり、会則一部変更（支部会費を年額二百円とする）の件を可決し、従つて昭和卅二年度予算を決定した。

次期支部長には菅琴二氏、副支部長には久野清氏を満場の拍手裡に推薦した。（別項参照）

新支部長の挨拶、新入会員の紹介、諸先生の挨拶があつて、懇親会に移り和気靄々のうちに午後八時散会した。

出席者

【来賓】鳥養会長、加藤先生、林重憲先生、山村幹事

明40 宮井　誠吉
明41 佐伯政之助
明41 滝口　三雄
明44 大森　丙
明44 佐藤　穩徳
大3 長島　正隆
大4 真崎　尚忠
大6 大西　冬蔵
大6 久高　将吉
大7 乙葉　真一
大8 高見　祥平
大9 小沢　仙吉
大9 菅　琴二
大9 西村　弁造
大9 松本　久長
大11 山口　信助
大12 池田　経喜
大12 小森　修二
大12 松本　弘
大12 福島秀次郎
大13 高島　正一
大13 田中　登
大13 高田太三郎
大13 巽　良知
大14 沢山　義一
昭2 岩本　種昌
昭2 太田　音吉
昭2 広瀬　一夫
昭2 難波　捷吾
昭2 交川　有
昭3 百東　猛
昭3 吉田喜久次
昭4 安達　遂
昭4 久野　清
昭6 足立　卓夫
昭6 藤田　真
昭6 佐竹　金次
昭6 石垣　悌次
昭7 浅井　光枝
昭8 西山　安三
昭9 石川　弘文
昭11 中山　健一
昭12 平田　穣
昭12 正木　知巳
昭13 松尾　三郎
昭13 村岡　勝
昭14 高崎　熟
昭14 横山　義一
昭15 山村　龍男
昭18 上之園親佐
昭18 荷口康一郎
昭20 老田他四郎
昭23 服部　周三
昭23 河野　義徳
昭24 桜井　繁樹
昭24 三浦　武雄
昭25 瀬野　健治
昭25 萩原　宏
昭26 久民　実
昭26 西岡　博
昭27 青木　信雄
昭27 井上　清
昭27 重本　直三
昭27 山本　春也
昭28 金田　佳郎
昭28 国枝　雄
昭28 佐藤　高也
昭28 花本　充夫
昭28 山本　淳三
昭29 多田　久守
昭29 中村　清
昭29 間瀬　光朗
昭29 村上　哲郎
昭29 松村　和男
昭29 白杉　茂
昭29 上村　隆俊
昭29 加納　顕一
昭30 谷　正男
昭30 荒木　襄
昭30 高橋　義造
昭30 中尾　英夫
昭30 竹内　哲
昭30 藤本　和弘
昭30 三好　良一
昭30 伊吹　公夫
昭30 龍治　隆
昭31 岩原　皓一
昭31 近藤　光洋
昭31 杉山　宏
昭31 荒木　孝雄
昭32 小沢　孝夫
昭32 道夫
昭32 中島　秀臣
昭32 筑後　淳一
昭32 松尾　巖
昭32 渡辺　寿夫

東京支部役員

支部長　菅　琴二
副支部長　久野　清
総務幹事　高崎　熟
庶務幹事　中尾　英夫
会計幹事　小沢　孝夫

趣味の会

ゴルフ　松本　久長
囲碁　正木　知巳
麻雀　老田他四郎
読書会　林　潔　山村龍男
深海　規　吉岡　忠

昭和三十二年度予算

一、収入の部

会費	八〇、〇〇〇円
寄附	一五〇、〇〇〇
前期繰越金	三一六、五三八
合計	五四六、五三八

二、支出の部

総会	三〇、〇〇〇
幹事会及び本部関係費	三〇、〇〇〇
読書会費	一四、〇〇〇
旅行会費	四〇、〇〇〇
趣味会費	一〇、〇〇〇
通信費	二〇、〇〇〇
雑費	六、〇〇〇
合計	一五〇、〇〇〇
予備費	三九六、五三八

昭和三十一年度決算報告

一、収入の部

会費	三九、三〇〇円
寄附	一七、〇〇〇
利子その他	二〇、五二二
繰越金	四三七、九〇〇
合計	五一四、七二二

二、支出の部

総会費	三二、六五〇
幹事会及び本部関係費	六四、三八四
読書会費	一二、一五〇
旅行会費	三四、四〇〇
趣味会費	二二、一六〇
通信費	一八、九五〇
雑費	一三、四九〇
合計	一九八、一八四
差引後期繰越金	三一六、五三八

第二回四国支部懇親会

去る六月八日、高松に林(重)、七里両先生をお迎えし、紅羽荘において第二回総会及び懇親会を開催した。

先づ総会においては卅一年度会務、会計報告を滞りなく終り、両先生の挨拶後、次回の開催について討議し、支部長一任という事になつた。

引続いて、懇親会に移つたが、当夜集いしものは老いも若きも総て生きのよい最高の？男の子ばかりでM特有の方式により忘却防止会？を盛大に挙行した。

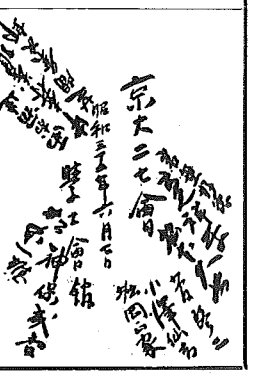
当日の参集者は両先生を含めて寄せ書の如く廿五人、集合率三六％で前回の約五〇％に比し、何んとアナライズすべきでしようか。

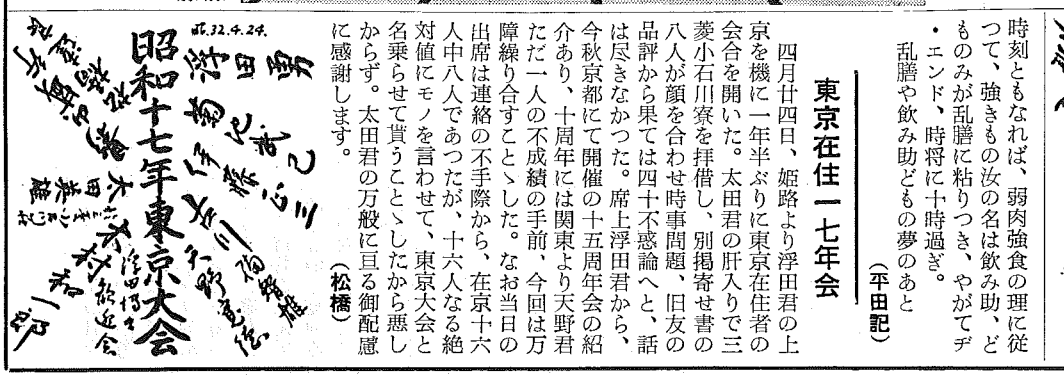
さて、飲むほどに酔うほどに例によつて例の如く、日頃のW的傾向？の片鱗も止どめず、M過剰を発揮し、やがてピークともなれば、林先生を先頭に会員が続々と十八番の珍芸御披露等と相成り、いつ果てるとも判らないほど興が乗つて来たが、地球の回転は如何んせん止どめる能わず、フイナーレがしづしづと迫る時刻ともなれば、弱肉強食の理に従つて、強きもの汝の名は飲み助、どものみが乱膳に粘りつき、やがてヂ・エンド、時将に十時過ぎ。

乱膳や飲み助どもの夢のあと

（平田記）

（前列右より）藤本、渡辺、安藤（自）、七里、林(重)、弘田、佐藤（中列右より）中川、北脇、宮地、徳岡、中沢、平井、安堂、奥田（後列右より）平田、森本、土居、今村、片岡、伊藤、西脇、森下、渡部(重)





東京在住一七年会

四月廿四日、姫路より浮田君の上京を機に一年半ぶりに東京在住者の会合を開いた。太田君の肝入りで三菱小石川寮を拝借し、別掲寄せ書の八人が顔を合わせ時事問題、旧友の品評から果ては四十不惑論へと、話は尽きなかつた。席上浮田君から、今秋京都にて開催の十五周年会の紹介あり、十周年には関東より天野君ただ一人の不成績の手前、今回は万障繰り合すことゝした。なお当日の出席は連絡の不手際から、在京十六人中八人であつたが、十六人なる絶対値にモノを言わせて、東京大会と名乗らせて貰うことゝしたから悪しからず。太田君の万般に亘る御配慮に感謝します。

（松橋）

昭二会 三十周年記念同窓会

昭和二年卒業の同窓生は、去る三月三十日を以て卒業後満三十周年を迎えたので、五月三日（憲法記念日）四日の両日を卜して、京洛の地に集い旧情を温めた。木屋町三条上ル川村樓（鉄斎ゆかりの料亭）に三日午後二時集合、懇談の後、四時に寺町三条上ル天性寺において青柳栄司、本野亨、清水義一、大竹太郎、井上昇の物故諸先生並に岩田健夫、植木英三、大西太郎、帯尾守次、柿崎小四郎、紫藤良人、清水新六、野村清一郎、波多野保夫、枷馬秀三、湯浅武雄、今川力、渡辺正春、橋本篤四郎の物故諸兄の霊を弔い、再度川村樓に戻つて記念撮影を行ない、六時から鳥養、岡本、松田、加藤、七里の諸先生を囲んで、東京、広島、四国の各遠隔の地から馳せ参じた同窓生廿五名が相集い、記念祝賀の宴に入つた。先づ瀬川幹事の挨拶があつて、木屋町一流どころの舞妓、芸妓をはべらせて懇談深更に及んだ。諸先生を御自宅にお送りしてから同窓生の大部分は同夜川村樓に合宿し、翌朝も朝寝、朝酒、朝湯の味いを満喫して、十一時から修学院の清景に心の塵を払い、山端の平八において昼食、高野川の新緑に更に俗塵を払つて、盛会裡に散会した。両日とも危ぶまれた天候も心配することなく、和気靄々裡に会を閉じ得たのは全く西枝、瀬川両幹事の努力と人格の力に負う処が大であるが、特に西枝君には物心共に一方ならぬ御迷惑をお掛けしたことを記し、感謝の意を表したい。また不参の同窓諸兄の方々からも物的な御援助を頂いたことを記し、併せて感謝の意を表する。

なお同窓会参加者の芳名を記せば左の通りである。（林重憲）

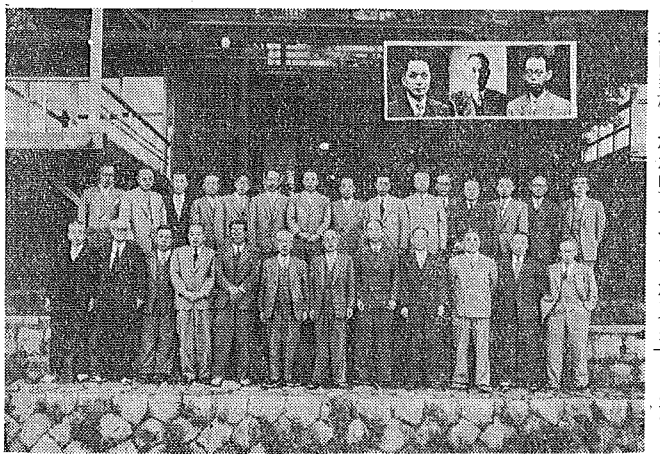
出席者（写真参照）

枠内（左より以下同じ）

鳥谷隆弘、鳥養先生、塩津均

後列。原戸逸治、西枝一江、瀬川健一、広瀬一夫、青山政次、千本木安次郎、路次安彦、和気忠文、太田音吉、真田安夫、本間昶、熊谷三郎、鵜飼二郎、交川有、柴田晃

前列。中村俊介、林重憲、宮地冬樹、桑畑二四夫、内田幸夫、加藤先生、岡本先生、七里先生、松田先生、堀内多雄、村松堅三郎、下村正男



卒業十五周年記念 クラス会

昭和十六年十二月卒業生

昨年十二月廿八日で卒業満十五周年を迎え、思い出の地京都下鴨、加茂川畔の鴨川荘で、新緑の五月十八日、記念クラス会を催しました。

当日、鳥養、阿部両先生はお差支えがあつて、御出席頂けなかつたのは残念でしたが、岡本、松田、加藤、羽村各先生は御多忙中を繰り合せ御出席下さいました。

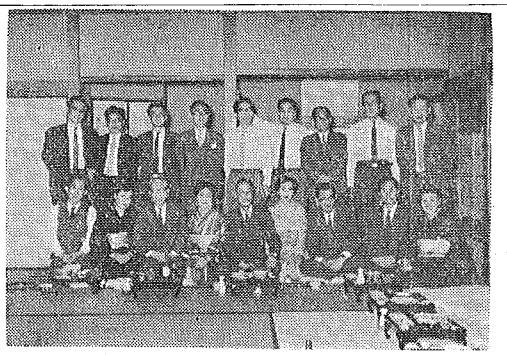
クラスでは遠来の大内田、小穴両兄をはじめ、立石、松重、森本、山本(四)、尾縄、加藤、竹屋、中山、西村(正)等、会する者十一名。

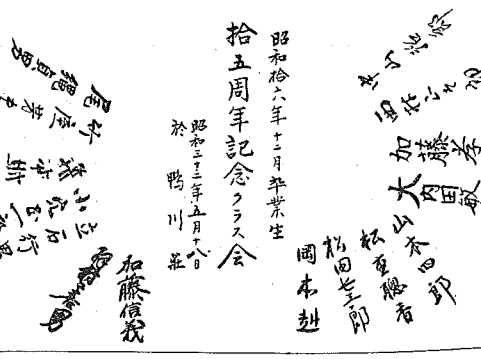
欠席の諸兄の返信の披露、出席者の近況報告があつて、宴たけなわとなりましたが、中には十五年振りというのもあつて話が尽きず、鳴り物を用意して早くから待機していた姐さん連中、聊か手持ち不沙汰の態でした。途中、先生方に記念品を贈り、記念写真を撮つて、名残りを惜しみながら解散しました。

先生方が、我々学生の頃と少しもお変りなく、益々御健勝で活躍されておいでになることは嬉しくも、また心強い限りです。また我々としても、卒業して十五年も経つと、そろそろ自分の顔に責任を持たねばならぬ年頃ですが、各自職域で中堅幹部として活躍していることは頼もしいことでした。

次の二十周年記念クラス会のプランも色々出ました。クラスの諸兄には特に御協力と御期待をお願いします。

なお今回の会場は、電々公社山本幹次兄のお世話によるもので、こゝに厚く御礼申します。（西村記）





◇本部より

◇第六回総会において次期総会開催地について諮りましたところ、広島という説もありましたが、結局幹事会に一任ということに決定しました。

例によりますと、隔年毎に支部所在地にて開催する事とし、その支部長の承諾の下に、出席率その他の状況をも考慮に入れて決定することになつております。

かような次第で、次期開催地は皆様の御希望に副うよう決定して、改めて御通知申上げます。

◇加藤先生記念会の行事は十一月二日(土)（文化の日の前日）に挙行されることになつておりますから、何卒賑わしく御来臨下さいますよう御案内申上げます。

◇本年度の会費納入は、会則変更のため二ケ月遅れましたが、出足よろしく幹事一同皆様の御協力を感謝しております。未納の方は何卒お忘れないようお願い申上げます。

◇誤植訂正

昭和卅二年度収支予算

一、収入の部

合計（誤）八五一、〇六九

（正）八五〇、〇六九

二、支出の部

予備費（誤）一六〇、〇〇〇

（正）一六〇、〇六九

◇昭和卅三年用洛友会名簿は来る十月中に配布の予定でありますから、同封ハガキにそれぞれ御記入の上、折返し御回報下さい。

加藤先生記念会醵金

加藤先生には本年十月廿八日を以て停年御退官される事になりましたので、先生の御功績を記念するため恒例により記念事業を行う事とし、卒業者各位に醵金をお願い致しておりますが、お陰様にて大方の御賛同を得まして続々お払込み頂いております。

尚今後とも卒業者各位の御協力をお願い申上げます。尚お払込み期限は八月末になつております。

会費領収

五月十日より七月五日まで到着の分

昭和二十一年度（自昭和廿八年度至昭和廿九年度）
金田佳郎　吉川哲夫

昭和二十二年度（自昭和廿九年度至昭和三十年度）
原豊明　高木敬三　宇野敏一

昭和二十三年度（自昭和三十年度至昭和廿一年度）
永井就一　堀川栄治　入間田一泰　高橋一敬　岡崎二郎　上田孝次　安田嘉之　大沢謙一　上田保之　藤村勉

昭和二十四年度（自昭和廿一年度至昭和廿二年度）
星野朔聡　高田七九　山本茂雄　安達賢一

昭和二十六年度（自昭和廿二年度至昭和廿三年度）
中尾景治　明四〇

昭和二十七年度（自昭和廿三年度至昭和廿四年度）
尾崎完　猶敏　己斐健三郎　末田和　外山敏夫　安藤慶一　杉山和夫　田村隆一　重本直三　堀江貞雄　常田幸

昭和二十八年度（自昭和廿四年度至昭和廿五年度）
国友末蔵　石津龍輔　柳瀬松喜　浅尾新十郎　石川芳次郎　梅田雄三　佐藤雅　河合賢三　大森丙　小嶋修三郎　鳥養利　宮崎駒吉　春名道喜　沼田七次郎　長島正隆　高柳与四郎　内田守　渡辺栄次郎　岡本尚忠　真崎尚　長井要雄　伊沢辰雄　辻忠夫　久塚徳雄　大村将行　高各務米次郎　阿部添清　岡柳次郎　魚住朝治　村田義人　仙石甲次郎　芝

昭和二十九年度（第一回）
五月十日より七月五日まで到着の分
田二郎　多田耕象　岡田象豊　宮井誠吉　鈴木徳之助　佐伯政之助　佐藤稔徳　川村公望　山岡岩雄　浜西野村茂樹　室伝肇浄　小村次貞朗　織田啓治　松尾正男　小笹彬進　牧　稲田虎彦　井上函二　光野重威　金子義憲　小柳助治　佐藤寿象　保一康男　楠本宗次郎　工藤寿一　乙葉真男　宮崎佐加枝　高見祥平　堀岡正家

昭和二十一年度
林堅太郎　池内是憲　岩垂好徳　光岡彰　天野次郎　幸前治一　小森修二　泉谷松太郎　清水誠治　菊池保夫　岡田彦邦　芦原義重　高本静雄　多田太三郎　滝本浩　西原藤吉　富永和郎　山上孝善　山崎雄　田中卓次　後藤利雄　前田安道　宮田秀介　太元正夫　和気忠文　真田幸安　内田種昌　岩本直寿　酒井精　青木太郎　小池恒久　吉田喜久次　上林民明　山県功　村上敏雄　高橋親雄　村田真治　白崎文雄　伊藤忠雄　山岡憲一　平田武夫　加茂忠恒　吉留二郎　野田忠実　上西亮二　石垣悌次　溝口毅　古田久一

昭和二十二年度
佐伯光太郎　沼倉三郎　山口信助　浜島昭次　松本弘　品川秀雄　片岡鉚太郎　村瀬邦朋　奥谷久彦　中村喜一　高島正一　田中通雄　西兼通人　弓削正雄　佐川重保　竹山義　沢山安　飯村三六　渡辺義一　小宮誠一　歌原和　西枝江　村松堅三　路内安多雄　堀内　畔柳愛三　山崎治　福山晴　村岡正吉　安村章一　木村広　森八郎　斐　正繁　平谷善　東　金井久兵衛　和田正昌一　真壁佐市　福井　大西正俊一　伊藤太郎　柳父　根本　一志朗

昭和二十三年度
竹内貞美　永田良孝　吉岡俊男　山下実　浅井光枝　田井梁之　田中信高　久保太郎　川端雄　戸山信芳　大塚重遠　喜田村善一　野口順一　大塚五郎　森島不二雄　殿井武治　森本昌武　香山日出雄　中山秀正　小堀林孝志　前田健一　森道生　黒川恒忠　清野武夫　岩元厳　今井正善　正知己　天野秀夫　小林四郎　松尾三郎　皆川良二　平野正彰　水野光　伊達怨一　富岡春　西堀博　田中哲郎　筑山義一　横山二郎　三上達三　小南充夫　北爪隆夫　肥後大介　大橋章男　坪井武彦　吉田達夫　平野敏也　前田隆美　嘉田治　山田健一

昭和二十四年度
萩原芳博　笠原登之兵　松井弘　上田盛雄　増田盤夫　高尾朝郷　蒲生敬　西村清也　西山英雄　阪本道　川完時　端一　内山政亮　山根豊　姫井昌治　角田清　池上淳　安達英　清原修　太田夫　高橋秀　斎藤良　福士政　森津太郎　西村正太郎

昭和二十五年度
和田寿　天野宗明　大曲俊彦　北村芳雄　竹中哲哉　石川弘文　西川豊蔵　阪本勇　大槻善三郎　橋本南海男　栗田圭哉　中原俊彦　八隅久明　水野勝己　伊藤定昌　南野幸雄　三上謹孝　広田方　塚本明　園山裕徹　木村清　村井寛治　梶谷守男　椿谷義和　三野村尚　河野徳　西村治　太田恒男　浅野収一　木村勇　須山武司　舟田正男　細田信　北野嘉　井上蔵　佐野喜　椿谷豊　三野村隆　石田成弘　藤島啓　奥村徹　藤原進　立川昭三　大倉富士雄

昭和二十六年度
福士政太郎　斎藤秀夫　高橋修　太田英雄　清原道也　安達時敬　池上淳一　角田寛　福慶泰一　内山政亮　姫井豊　山根清　橋本海　栗田圭　南海男　中原俊彦　八隅久明　水野勝己　伊藤定昌　南野幸雄　三上謹孝　広田方　塚本明　園山裕徹　木村清　村井寛治　梶谷守男　椿谷義和　三野村尚　河野徳　西村治　太田恒男　浅野収一　木村勇　須山武司　舟田正男　細田信　北野嘉　井上蔵　佐野喜　椿谷豊　三野村隆　石田成弘　藤島啓　奥村徹　藤原進　立川昭三　大倉富士雄

（以下次号）
村田　山本　片岡　松見　江見　船橋　楠本　伊藤　荷口　福盛　内山　清水　高橋　永川　山合　木村　大鳥羽　小幸　太郎　通隆　深　盛敏　小一　義一郎　陽本　康一郎　剣修　耕一郎　孔平　福三郎　孟雄　増岡　健洋　利良　圭一介　清水幸四郎　高橋良一　上田敏行　坂井　大賀　松本　高月　深津井　服部　高田　周章泰　信一三　忠孝　良三之　園山　塚本　木村井　村谷　梶守　寛治　清裕　徹明　広田　方謹孝　井上　平田　宰造　南野　幸雄　中原　俊彦　八隅　久明　水野　勝己　伊藤　定昌　橋本　南海男　栗田　圭哉　姫井　豊　山根　清　内山　政亮　大槻　善三郎　福慶　泰一　角田　淳一　池上　敬　安達　時　清原　道也　太田　英雄　高橋　修　斎藤　秀夫　福士　政太郎　森津　良　西村　正太郎